

# 復興と地域社会の人口動態および空間変容

—東日本大震災および能登半島地震からの復興を考える

Reconstruction from the Perspective of Demographic Dynamics and Spatial Transformation

—Thinking about Reconstruction from the Great East Japan Earthquake and Noto Peninsula Earthquake

平原 幸輝 早稲田大学 人間科学学術院 助教  
Yuki HIRAHARA

## 1. はじめに

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。あれから13年となる2024年3月、岩手県陸前高田市を訪れると、被災された方に祈りを捧げる多くの人々をお見かけした。

被災から10年以上経過した中で、地域社会の復興の様子を問うと、震災当時から市内で生活する80代の女性は、「みんな年をとった」、「街が静かになった」と語る。その女性は、持病なども背景に、生まれ育った土地で生活することを選び、その地域に居住し続けることを選択したと言う。また、県外から訪れ、妻子を連れていた50代の男性は、震災当時、子育て環境なども理由に、生まれ育った土地を離れることを選んだと言う。

2024年1月1日には、能登半島地震が発生した。地理的条件などの差異もある中で、本稿では、能登半島地震からの復興について考える。特に、人口に焦点を当てつつ、東日本大震災からの復興を、一つの参考として、考察を行う。

## 2. 被災地の人口構造

被災地の人口を捉えるにあたり、東日本大震災については、被害の大きかった岩手県の沿岸自治体、能登半島地震については石川県輪島市と珠洲市を対象とする。図1は、分析の対象となった地域を明示したものである。

東日本大震災発生時の人口構造に関連して、2010年の

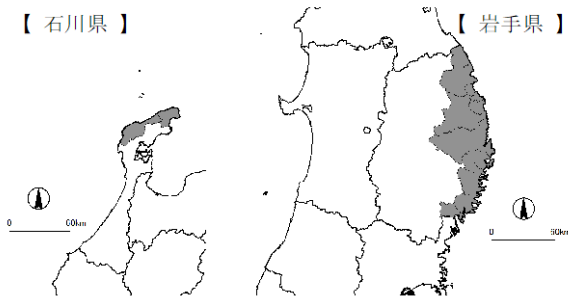


図1 分析の対象地域

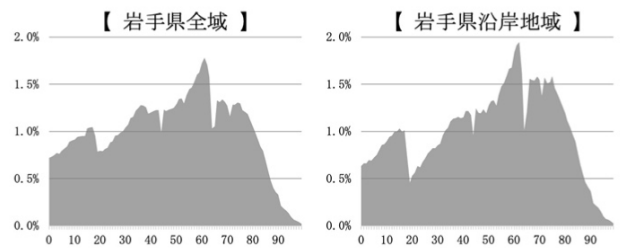


図2 岩手県沿岸地域の人口構造 (2010年)

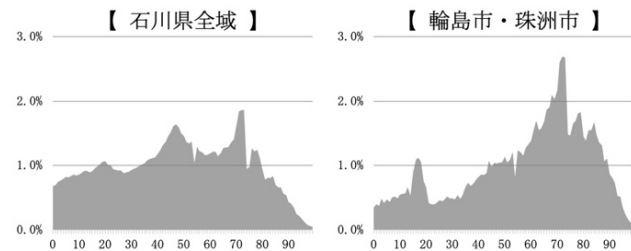


図3 石川県輪島市・珠洲市の人口構造 (2020年)

「国勢調査」データにおける岩手県全域と沿岸地域の年齢別人口割合を比較したものが、図2である。

沿岸地域は、岩手県全域に対して、20代・30代が少なく、65歳以上が多い状況にあった。高齢化率は全域の27.5%に対して、沿岸地域は31.6%であった。

能登半島地震発生時の人口構造に関連して、2020年の「国勢調査」データにおける石川県全域と輪島市・珠洲市の年齢別人口割合を比較したものが、図3である。

輪島市・珠洲市は、石川県全域に対して、50代未満が少なく、60歳以上、特に80歳以上が多い状況にあった。高齢化率は全域の30.0%に対して、輪島市・珠洲市は48.1%であった。約半数が高齢者という状況である。

## 3. 出生コホート別の人口推移

能登半島地震の被災地が深刻な高齢化に直面する中で、復興の主な担い手はどの層になるのだろうか。その参考として、東日本大震災の前後での、岩手県沿岸地域の出生コ

表1 岩手県沿岸地域の出生コーホート別の人口推移

		2000年	2010年	2020年	2010～ 2020年の 人口増減率
		人口	人口	人口	
岩手県 全域	1921～1930年生	142216	94166	30273	-67.9%
	1931～1940年生	189122	163974	111810	-31.8%
	1941～1950年生	198251	188468	165294	-12.3%
	1951～1960年生	197961	190545	181396	-4.8%
	1961～1970年生	164369	160070	156029	-2.5%
	1971～1980年生	161575	157965	157032	-0.6%
	1981～1990年生	162915	118617	117924	-0.6%
1991～2000年生	133400	127224	90037	-29.2%	
岩手県 沿岸 地域	1921～1930年生	34322	22081	6410	-71.0%
	1931～1940年生	46597	39949	24852	-37.8%
	1941～1950年生	45896	43193	36004	-16.6%
	1951～1960年生	41850	39787	36405	-8.5%
	1961～1970年生	34138	32289	30644	-5.1%
	1971～1980年生	28174	28546	26909	-5.7%
	1981～1990年生	33517	19015	19449	2.3%
1991～2000年生	29012	24721	14483	-41.4%	

一ホート別の人口推移を示したものが表1である。

ここでは1981～1990年生まれのコーホートに注目したい。死亡による自然減少と転出による社会減少から成る人口減少が、全域に対して、沿岸地域では大きいものの、先述のコーホートでは震災前後で人口増加となっている。20代から30代になるにかけて人口が増加するケースは、2000年から2010年までの1971～1980年生まれのコーホートでも生じているが、その人口増減率は+1.3%であり、震災前後での1981～1990年生まれのコーホートの方が増加傾向は強い。震災当時、主に20代だった人々が、地域を離れず、または減少を補う程度の転入があり、人口が維持され、彼らが復興の一角を担ったとも考えられる。

地域の持続可能性、将来性の観点からも、被災当時の若者世代が、復興にどう携わっていくかと言う点は非常に重要である。彼らが従事する仕事・産業を維持・拡大することも、復興に関連して、必要なことと考えられ、これは、高齢化が深刻で、現時点で若者の少ない能登半島においても、同様に重要であろうと考察される。

#### 4. 地域における空間の変容

被災地という地域の内部における人口動態を捉えた上で、その空間の変容についても捉えておこう。図4は、岩手県陸前高田市の2010年と2020年の人口推移を、500mメッシュ単位の社会地図で示したものである。

震災の前後で、人口が集中するメッシュは、内陸部にシフトしていることが見てとれる。

図5のように、陸前高田では、浸水した旧市街地を避け、盛り土がされた高台に新市街地が形成された。垂直方向の移動とともに、内陸部への水平移動も生じたのである。復興の過程におけるこの移動によって、人々の集まるエリアも集約され、地域機能の集約も果たされてきている。

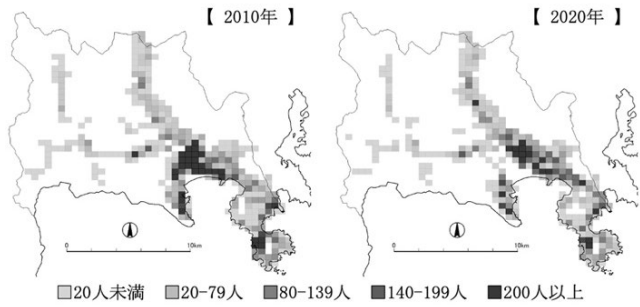


図4 メッシュ単位で見た岩手県陸前高田市の人口



図5 岩手県陸前高田市の旧市街地（左）と新市街地（右）

#### 5. おわりに

冒頭に登場した80代の女性は、「用事のあるところが、近くにあるのは助かる」とも語っている。高齢者の多い地域における地域機能の集約には一定の意義もあろう。

能登半島地震で被害を受けた石川県輪島市・珠洲市は、東日本大震災で被災した岩手県沿岸地域より、約半数が高齢者という、より深刻な高齢化に直面しており、生産年齢人口も少ないため、復興の担い手不足が懸念される。

そうした中で、東日本大震災で被災した地域においては、当時の20代といった若者の人口が維持されたことや、コンパクトシティとも関連するように、内陸部への人口および地域機能の集約が果たされてきたことも指摘された。

能登半島地震からの復興については、高齢者が非常に多いことから、積極的な貸付型の支援は困難であるといった政策的な方向性ととも、彼らの生活と防災への観点から、内陸部への地域機能の集中、安全の確保、それらとともに雇用の確保・創出による若年人口の維持・拡大などを、同時並行的に進めていくことが求められていると考える。